

<書評>

埼玉に夜間中学を作る会・川口自主夜間中学三十周年誌刊行委員会 編
『月明かりの学舎から 川口自主夜間中学と設立運動三十年の歩み』

東京シュレー出版 2016年8月

関本保孝（元夜間中学校教員）

1982年度に開設された千葉県市川市立大洲中学校夜間学級が、たった3年で生徒数名となり存続が危ぶまれる中、松崎運之助先生の呼びかけで1985年に「ザ・夜間中学100人トークマラソン集会」が市川市で開催された。集会の終わりの方で、集会の雰囲気そうさせたのか埼玉の有志3名が「埼玉でも夜間中学の設立運動を始める」と宣言したが、その時の様子はその場にいたわたし自身鮮明に覚えている。

川口市長は今年になって「2019年度川口市に夜間中学を開設する」と明言しており隔世の感があるが、この本はここに至るまでの「スタッフと学習者の苦難の30年誌」と言っている。以下、概要を述べる。

第1章 埼玉の三十年と今後の展望
「埼玉に夜間中学を作る会」発足、前半の運動、『共同開設方式』提案、議員連盟視察、法制化等からなる。

第2章 川口自主夜間中学の歩み
「来るもの拒まず。一人ひとりを大事にする。教えられる人と教える人の間に隔てはない。」のモットーや貧困の問題、外国人の学びの場、充実した自主夜間中学のために、十五の春を泣かせない、ある女性スタッフの日々(金子自主夜間中学代表)、埼玉の夜間中学との出会い(小松事務局長・小松愛子)、夜間中学があつて息子は救われた(小松愛子)、開設の頃の十年の足取り(野川義秋)等、運動の中心的な人を通しての証言は大変重い。

第3章 学舎の窓に映る人生模様

不定期に発行されている文集『胎動』に掲載された学習者の作文を通じ、一人ひとりの人生模様を映し出す。戦争で学校が焼け学校に行けなくなった方、家が貧しく学校へ行けなかった方、在日の方、元不登校の方、アルゼンチンやブラジル、イラン、中国から来た方等、一人ひとりの目を通し自主夜間中学の生きた姿が浮かび上がってくる。

第4章 わたしと夜間中学

「九十歳の生徒 阿部次子さんの近況」「『字を習いたい』無言の叫び—ふみ子さんとの出会い」「日本語を必要とする子どもたち」「『未来に向けた一歩』の後押しをしたい」「川口自主夜間中学への道」「夜間中学の誕生と移り変わり」等からなる。阿部さんは全国夜間中学校研究会が全国への公立夜間中学開設を目指し日本弁護士連合会に人権救済申立を行った際、ご自身の学ぶことができなかった歩みと公立夜間中学開設の必要性を述べた陳述書を日弁連に提出していただき、意見書が出される上で大きな力となった。

また、最後の項目では野川さんが鹿児島県山間の農家の6人兄弟の3番目として生まれてからの歩みも書かれ、だからこそ「埼玉に夜間中学開設をと30年以上信念を貫いたのだ」と強く感じた。

なお、本書の付録として「埼玉の夜間中学運動三十年の軌跡」が収録されている。